

スポーツのチカラ まちのミライ



2030年北海道・札幌オリンピック・パラリンピック冬季競技大会が実現すると、
私たちの街・札幌はどのような姿へと変貌を遂げるのでしょうか？
札幌大学客員教授の中田美知子さんにお話を伺いました。

冬季オリンピック・パラリンピックを
契機に変わる街と人
次世代に“レガシー”を遺したい



札幌大学客員教授 中田 美知子 さん

東京出身、'72年HBCに入社し北海道へ。2年後退職、以後フリー。'88年エフエム北海道入社。'96年「FM新時代の語り部」として「ギャラクシー賞D」「パーソナリティ賞」受賞。同社常務取締役を経て、現在は札幌大学客員教授。

取材協力：札幌大学

沸き立つ街と人
“オリンピックの持つ力”とは

1964年の東京オリンピックは私が中学生の頃。トラック競技を実際に観戦して、すぐ目の前で世界の一流選手たちの熱戦が繰り広げられた感動は、今でも脳裏に焼き付いています。そして、1972年の札幌冬季オリンピック。閉幕直後の札幌にやってきた私に、人々はどれほど札幌の街が変わったのかを興奮冷めやらぬ様子が語ってくれました。市営地下鉄や地下街の開業、高速道路の開通。大会や選手との尽きぬエピソード……。街も人も全てが高揚して、前向きな力にあふれていた。そんな楽しい記憶を思い起こされて、私はオリンピックが大好きなんです。

パラリンピックの初開催で

「すべての人にやさしい街」へ

大会が実現した時、特に楽しみなのが、札幌では初となるパラリンピックの開催です。東京2020大会で「パラリンピックは面白い」と感じた人は多かったと思うんですよ。ポツチャやゴールボールなど競技自体の面白さ、純粹にパラアスリートの能力の高さに魅了されてね。札幌市は人口200万人の大都市ですが、福祉インフラに関してはまだまだ不十分。また素晴らしい都市ブランド力を持ちながら、国際化の遅れも指摘されています。パラリンピック開催を機に公共空間のバリアフリー化が進み、超高齢社会にも対応した全ての人にやさしい街に生まれ変わる。他者の多様性や価値観を尊重することで、真の国際化が進む。招致を成功させ本場の意味での「レガシー（遺産）」を、次世代に遺せたいですね。